

19. 3. 29

樞密院會議筆記

北ザガレンニ於ケル日本國ノ石

油及石炭利權ノ移讓ニ關スル議
定書締結ノ件

日本國ソウイェト社會主義共和
國聯邦間漁業條約ノ五年間效力

存續ニ關スル議定書締結及關係
公文交換ノ件

昭和十九年三月二十九日(水曜日)午後五時十五

分開議

聖上臨御

出席員

原 議長

鈴木副議長

大臣

東條内閣總理大臣兼陸軍大臣 五番

小泉厚生大臣 六番

岩村司法大臣 七番

鳴田海軍大臣 八番

安藤内務大臣 九番

青木大東亞大臣 十番

重光外務大臣 十一番

岡部文部大臣 十二番

石渡大藏大臣 十三番

内田農商大臣 十四番

顧問官

石井顧問官 十七番

窪田顧問官 十九番

清水顧問官 二十番

南(弘)顧問官 廿一番

奈良顧問官 廿二番

松井顧問官 廿三番

菅原顧問官 廿四番

松浦顧問官 廿五番

潮顧問官 廿六番

深井顧問官 廿八番

二上顧問官 廿九番

眞野顧問官

三十番

小幡顧問官

卅二番

竹越顧問官

卅三番

三土顧問官

卅四番

伊澤顧問官

卅五番

南(次郎)顧問官

卅七番

泉二顧問官

卅八番

平生顧問官

卅九番

闕席員

親王

雍仁親王

一番

宣仁親王

二番

崇仁親王

三番

載仁親王

四番

大臣

五島運輸通信大臣

十五番

顧問官

有馬顧問官

十八番

林顧問官

廿七番

大島顧問官

卅一番

池田顧問官

卅六番

委員

森山法制局長官

佐藤法制局參事官

上村外務省政務局長

安東外務省條約局長

久保大藏省外資局長

重政農商次官

寺田農商省水產局長

報告員

鈴木副議長

書記官長

堀江書記官長

書記官

諸橋書記官

高辻書記官

議長(原) 之ヨリ會議ヲ開ク

北サガレンニ於ケル日本國ノ石油及石炭

利權ノ移讓ニ關スル議定書締結ノ件

日本國ソヴイエト社會主義共和國聯邦間

漁業條約ノ五年間效力存續ニ關スル議定

書締結及關係公文交換ノ件

以上二件ヲ一括シテ議題ニ供ス第一讀會ヲ

開キ朗讀ヲ省略シテ直ニ審査委員長ノ報告

ヲ求ム

報告員(鈴木) 今回御諮詢ノ北サガレンニ於ケ

ル日本國ノ石油及石炭利權ノ移讓ニ關スル
 議定書締結ノ件竝ニ日本國ソヴイエト社會
 主義共和國聯邦間漁業條約ノ五年間效力存
 續ニ關スル議定書締結及關係公文交換ノ件
 ニ付本官等全員審査委員タルノ命ヲ承ケ本
 日委員會ヲ開キ當局大臣及關係諸官ノ辯明
 ヲ聽キ慎重之ガ審査ヲ遂ゲタリ
 今本案各件ノ要旨ヲ述ブレバ左ノ如シ
 第一 北サガレンニ於ケル日本國ノ石油及
 石炭利權ノ移讓ニ關スル議定書締結

ノ件

當局大臣ノ説明ニ依レバ帝國政府ハ曩ニ
 大正十四年一月二十日ノ日本國及ソヴイ
 エト社會主義共和國聯邦間ノ關係ヲ律ス
 ル基本的法則ニ關スル條約ノ附屬議定書
 ニ基キ北サガレンニ於テ石油及石炭ノ兩
 利權ヲ取得シ爾來夫々北樺太石油株式會
 社及北樺太鑛業株式會社ヲシテ之ガ經營
 ニ當ラシメタルガソ國政府ハ其ノ國力ノ
 伸張ト相俟テ漸次自國領域内ニ於ケル外

國利權ノ回收ヲ企圖シ著々之ガ成功ヲ見
 タリ然ルニ昭和十一年日獨兩國間ニ防共
 協定成立スルヤソ國官憲ハ前述兩利權ニ
 對シテ露骨ナル壓迫ヲ加ヘ來リ爲ニ兩利
 權ノ業績ハ漸次惡化スルノ外ナキニ至レ
 リ其ノ後帝國政府ハ日ソ兩國關係ヲ根本
 的ニ調整セントシソ國政府ニ對シ兩度ニ
 互リ中立條約乃至不侵略條約ノ締結方ヲ
 提議シタルニソ國政府ハ中立條約ノ締結
 ニ同意セルモ其ノ代償トシテ北サガレン

利權ノ解消ヲ要求スル等該交渉ハ一時頓
 挫スルニ至レルガ昭和十六年松岡外務大
 臣訪歐ノ歸途モスコ¹ニ於テ同國政府當
 局ト會見シ重ネテ右ノ交渉ヲ開始シタル
 ニ同政府ハ依然トシテ前述ノ主張ヲ固執
 セルヲ以テ同大臣ハ當時兩國政府間ニ交
 涉中ナリシ漁業通商及國境問題解決ニ關
 スル希望ト共ニ前述ノ利權整理ノ爲努力
 スベキ旨ノ半公信ヲモ口トフ外務人民委
 員ニ與ヘ以テ中立條約ヲ妥結セシメタリ

爾來ソノ國政府ハ帝國政府ニ對シ右了解ノ
實行ヲ求ムルコト一再ニ止マラザリシガ
客年ニ入り更ニ漁業交渉トモ關聯セシメ
テ愈々強硬ニ之ガ急速實現方ヲ要求スル
ニ至リ帝國政府ハ世界戰局ノ推移ニ鑑ミ
日ゾ國交ノ改善ヲ圖ルヲ以テ喫緊ノ要務
ト爲シ此ノ際前述ノ兩利權ヲソノ國ニ移讓
シ以テ對ゾ政策今後ノ推進ニ資スルヲ得
策ナリト認メ漁業條約ノ締結ト併セテ本
件交渉ノ急速ナル妥結ヲ圖ルコトトシ銳

意同國政府ト折衝ヲ重ネタル結果稍ク雙
方ノ意見一致シ爰ニ本議定書及本議定書
適用條件ノ案文ノ妥結ヲ見ルニ至レリ

(甲) 議定書

本議定書ハ其ノ前文ニ於テ日ソ兩國ハ
昭和十六年四月十三日ノ中立條約ニ關
聯シ兩國政府間ニ成立セル北サガレン
ニ於ケル日本國ノ石油及石炭利權ノ解
消ニ關スル了解ヲ實現スルノ目的ヲ以
テ爲サレタル商議ノ結果トシテ協定ス

ル旨ヲ掲ゲ次デ其ノ本文ニ於テ(一)日本
國政府ハ北サガレンニ於ケル同國ノ石
油及石炭利權ニ關スル一切ノ權利ヲ本
議定書及之ニ附屬スル議定書適用條件
ノ定ムル所ニ從ヒゾ國政府ニ移讓スベ
ク又ゾ國政府ト日本國利權者トノ間ニ
締結セラレタル利權契約同追加契約及
關係取極ハ本議定書ニ依リ廢止セラル
ルモノトシ(二)日本國利權者が北サガレ
ンニ於テ所有スル一切ノ財産ハ本議定

書及本議定書適用條件ニ別段ノ規定ナ
キ限り現在ノ状態ニ於テゾ國政府ノ所
有ニ移サルベク(三)前二項ニ關聯シゾ國
政府ハ日本國政府ニ對シ本議定書適用
條件ノ規定ニ從ヒ五百萬ルーブルノ額
ヲ支拂フノ外オハ油田ニ於テ採取セラ
ル石油ヲ通常ノ商業條件ニ依リ現在
ノ戰爭終了ノ時ヨリ引續キ五年間毎年
五萬メートルトン供給スルコトトシ(四)
ゾ國政府ハ日本國政府ニ對シ本議定書

適用條件ノ規定ニ從ヒ日本國利權者ノ
貯藏スル石油及石炭ヲ利權地ヨリ支障
ナク且無税ニテ搬出スルコトヲ保障ス
ルコトヲ約シ(五)本議定書ハ日露兩文ヲ
以テ作成セラレ同等ノ效力ヲ有シ署名
ノ日ヨリ實施セラルベキ旨ヲ定メタリ
○(乙)議定書適用條件

本件ハ議定書第一條乃至第四條實施ノ
爲必要ナル諸條件ニ關シ日ソ兩國全權
委員間ニ成立セル了解ニシテ(一)利權企

業ニ從事スル日本人従業員ノ引揚ニ際
シテノ時期及便宜供與茲ニ石油及石炭
利權ノ移讓ニ關聯シ従業員ニ支拂フベ
キ退職手當ニ關スル事項(二)日本國利權
者ガ日本國領域内ニ於テ所有スル財産
及現地ニ於テ所有スル現金銀行預金ノ
保有ニ關スル事項茲ニソ國政府ガ利權
者ニ對シテ有スル裁判上及金錢上ノ請
求ノ拋棄ニ關スル事項(三)ソ國政府ガ日
本國政府ニ對シ支拂フベキ金額ノ支拂

方法(四)搬出セラルベキ貯油及貯炭ノ數量搬出方法茲ニ之ガ爲供與スル便宜及援助等ニ關スル事項ヲ定ムルモノナリ

第二 日本國ゾヴイエト社會主義共和國聯

邦間漁業條約ノ五年間效力存續ニ關

スル議定書締結及關係公文交換ノ件

昭和三年一月二十三日署名セラレタル日

ゾ兩國間漁業條約ニ付テハ昭和十一年其

ノ有効期間滿了スルニ當リ同條約第十五

條ノ規定ニ基キ其ノ前年即チ昭和十年六

月ヨリ改訂ノ商議行ハレタルガ昭和十一

年中ニ妥結ニ達セズ爾來昭和十八年迄八

回ニ互リ毎年條約ノ有効期間ヲ一年宛延

長シ昭和十八年十二月末日迄其ノ效力ヲ

持續シタリ此ノ間昭和十六年ニハ新條約

締結ノ交渉ヲ進メ相當ノ進捗ヲ見タルガ

尚重要ノ點ニ付彼我ノ意見一致セズ商議

ヲ繼續中偶々獨ゾ戰爭勃發シ遂ニ中絶ノ

己ムナキニ至リ翌昭和十七年ニハ我方ヨ

リ獨ゾ戰爭及大東亞戰爭後發生セル事情

ノ變化ニ應ジタル新條約案ヲ提議スル所
アリタルモソノ國政府ノ容ルル所ト爲ラズ
商議ハ依然困難ヲ極メタリ茲ニ於テ我方
ニ於テハ借受漁區ノ大部分ニ付貸付期間
ノ滿了スル昭和十八年末迄ニ成ルベク交
渉ヲ取纏ムルヲ必要ト認メ交渉ノ重點ヲ
現有漁區ノ安定確保ニ置クノ方針ヲ決定
シ爾來兩國代表者間ニ於テ銳意商議ヲ續
行シ其ノ交渉ニ於ケル雙方ノ主張ニ付テ
ハ相互ニ讓歩ヲ爲シ以テ稍ク妥結ニ達シ

茲ニ本件ノ議定書並ニ其ノ附屬文書タル
交換公文四件ノ作成ヲ見ルニ至レリ

(甲) 議定書

本議定書ニ於テハ(一)前述ノ日ソ兩國間
漁業條約及之ニ附屬スル一切ノ文書議
定書最終議定書交換公文及會議録ハ本
議定書ノ規定スル條件ノ下ニ本年一月
一日ヨリ起算シ五年間引續キ其ノ效力
ヲ保有スベキコト(二)ソノ國ノ漁業團體及
人民ノ漁業ノ經營ニ關スル一切ノ問題

ハ專ラゾ國ニ依リ處理セラレ漁業條約
及其ノ附屬文書中ノ關係規定ハ總テ其
ノ效力ヲ失ヒ今後適用セラレザルベキ
コト(三)漁業條約附屬議定書(甲)第一條ニ
列記セラレタル漁業區域外ノ入江及漁
業禁止區域ニ若干ノ追加及修正ヲ爲ス
コト(四)漁業條約附屬交換公文第一號所
定ノ抵代税ハ當該漁區ノ貸付ニ對スル
報償金ノ百分ノ二十八ナルヲ其ノ百分
ノ三十迄引上グルコト(五)漁業條約附屬

議定書(丙)ノ(乙)(六)ニ掲ゲタル罐詰工場ノ
經營ニ對スル特別報償金ノ定率ヲ各若
干引上グルコト(六)本議定書ハ日露兩文
ヲ以テ作成セラレ同等ノ效力ヲ有スル
モノトシ署名ノ日ヨリ實施セララルベキ
コトヲ定メタリ

(乙)交換公文

前述ノ議定書ニ附帶シテ兩國全權委員
間ニ交換スル公文ハ左ノ第一號乃至第
四號ノ四件ナリ

(一) 交換公文第一號ハ漁區ノ貸付ニ關ス
ルモノニシテ(イ)ゾ國政府ハ昭和三年締
結ノ帝國臣民ニ依ル罐詰工場及右工場
ニ割當テラレタル漁區ノ經營ニ關スル
特別契約竝ニ其ノ關係文書及其ノ後ノ
追加取極ノ效力ヲ議定書及其ノ附屬文
書ニ別段ノ規定ナキ限り從前ノ條件ノ
下ニ本年一月一日ヨリ起算シ五年間更
新スルコトニ同意スルコト(ロ)帝國臣民
ニ貸付セラレタルモノ昭和十四年及同十

五年ノ二年間休營ノ二十四漁區ハ其ノ
貸付期間ノ滿了セルト否トニ拘ラズ閉
鎖セラレ將來競賣ニ付セラルルコトナ
カルベキコト(ハ)上掲兩種ノ漁區ヲ除キ
昭和十八年末現在ニ於テ帝國臣民ニ貸
付セラレ居リタル漁區ハ其ノ貸付期間
ノ滿了後漁業條約附屬議定書(甲)第六條
第一項所定ノ夫々ノ貸付期間ヲ以テ競
賣ニ依リ貸付セラルベク而シテ今後毎
年行ハルル競賣ニ際シゾ國ノ漁業團體

及人民ノ競落スベキ漁區ノ數ハ當該年
度ニ於テ競賣ニ付セラルベキ漁區ノ總
數ノ百分ノ十ヲ超エザルベク又ソノ國ノ
漁業團體及人民ハ罐詰工場ノ設置セラ
レタル漁區ヲ競落スル意圖ヲ有セザル
コトヲ定メタリ

(二) 交換公文第二號ハ前陳議定書第三條

(イ) ノ規定ニ關スルモノニシテ右規定ニ

掲ゲタル五箇ノ漁業禁止區域ノ境界ヲ
明ニシ此ノ境界ハ現在ノ戰爭ノ終了ニ

至ル迄ノ期間設定セラルルモノナルコ
トヲ定メタリ

(三) 交換公文第三號ハ特定地區ニ於ケル

帝國臣民ノ借受漁區經營ノ制限ニ關ス

ルモノニシテ帝國政府ハソノ國政府ノ要

望ニ依リガムチアトカ東海岸及オリユ

ートル地區ニ於テ帝國臣民ノ借受ケ居

ル一切ノ漁區が太平洋ニ於ケル戰爭ノ

終了スル迄右漁區ノ借受人ニ依リ經營

セラレザルベキ旨保障スルコトニ同意

シ右漁區ノ帝國臣民ニ依ル經營差控ノ事實ハ前掲地域ニ存在スル何レノ漁區又ハ工場ノ經營ニ關スル契約ニ付テモ解除ノ原因ト爲ルコトナキモノト了解セラレベキコトヲ定メタリ

(四) 交換公文第四號ハ漁區ノ貸付ニ對スル報償金、抵代税ヲ成ス税金及手数料並ニ保證金ノ支拂ニ關スルモノニシテ此等ノ支拂ニ付テハ從來ノ「アコ」債券ニ依ル支拂手續ヲ廢止シ帝國臣民タル漁區

借受人ガ「ソ」國國立銀行ノ爲替相場表ニ依リ日本圓ヲ以テ支拂フコトトシ其ノ支拂條件及手續ヲ定メ之ニ伴ヒ「ソ」國政府ハ「ル」ーブル表示ノ報償金ノ再計算ヲ行ヒ及之ヲ所定ノ率ニ依リ遞減スルコトニ同意シ之ガ適用方法ヲ定メタリ尚本交換公文ハ公表セザルモノトス按ズルニ本案ノ二件中前者ハ大正十四年日「ソ」兩國間ニ締結セラレタル日「ソ」基本條約ノ附屬議定書ニ基キ帝國ガ「ソ」國ヨリ取得シタ

ル北サガレンニ於ケル石油及石炭ノ兩利權
ヲ昭和十六年日ソ中立條約締結ノ際ニ於ケ
ル兩國政府間ノ了解ノ趣旨ニ基キソ國ニ移
讓センガ爲必要ナル取極ヲ締結セントスル
モノ、後者ハ昭和三年締結セラレタル日ソ間
漁業條約ニ付其ノ有効期間滿了後毎年暫定
取極ニ依リ八回ニ互リ之ガ效力ヲ一年宛延
長シ來レルヲ今回其ノ效力ヲ五年間存續セ
シムル爲新ニ取極ヲ締結セントスルモノニ
シテ外交上極メテ重要ナル案件ナリ而シテ

本件兩取極ノ締結ハ現下ノ事態ニ鑑ミ蓋シ
相當ノ措置ナリト認メラル仍テ審査委員會
ニ於テハ本案ノ二件ハ孰レモ此ノ儘之ヲ可
決セラレ然ルベキ旨全會一致ヲ以テ議決シ
タリ

右審査ノ結果ヲ報告ス

二十八番

(深井)

簡單ニ贊成ノ理由ヲ申述ベタ

シ本案二件ハ我方ニ於テ或程度ノ讓歩ヲ爲
シタルモノナルガ現下ノ時局ニ對スル政治
的考慮ノ上ヨリ我國現時ノ國際的立場ヲ強

化スルモノナリトスル政府ノ説明ニハ深キ
共鳴ヲ覺ユルモノニシテ是レ本官が本案ニ
件ノ成就ヲ賛成スル一ノ理由ナリ他ノ理由
ハ本案ニ依リ我國ノ外交が弾力性ヲ失ハズ
國際情勢ノ變化ニ應ジ我國力ニ顧ミテ妥當
ナル方策ニ出ヅルコトノ表明セラレタル點
ナリ抑々國際情勢ノ變轉シテ限リナキコト
ハ喋々ノ要ナク之ヲ對ゾ關係ニ觀ルモ近ク
ハ日獨防共協定ニ始マリ獨ゾ不可侵條約ト
ナリ日ゾ中立條約ヲ經テ遂ニ獨ゾ開戦スル

ノ不可思議ナル經路ヲ辿リ以テ今日ニ及ベ
リ日ゾ中立條約ハ今ヤ當初期待サレタル所
ト異ナル意味ニ於テ有益ト爲リ政府ハ克ク
之ヲ看破シテ本案ノ措置ヲ執ラレタルハ機
宜ヲ得タル所ト謂フベク本官ハ政府が今後
モ國際情勢ノ變化ニ應ジ妥當ナル措置ヲ執
ラレシコトヲ思ヒ深ク喜ブ所ナリ
五番 (東條) 御賛成ノ意見ヲ拜承シ深キ喜ヲ感
ズル次第ナリ而シテ作戰ト謂ハズ外交ト謂
ハズ總テ相手ヲ伴ヒ從テ戰爭指導ノ觀點ヨ

り其ノ出方ニ應ズルハ固ヨリナルガ根本ハ
一ニ懸テ戦争目的ノ達成ニ在リ之ヲ基本ト
シテ相手ノ出方ニ顧ミ適宜ノ措置ヲ講ズベ
キナリ此ノ意味ニ於ケル御賛成意見ナリト
思料シ茲ニ政府ヲ代表シテ御禮ヲ申上グル
次第ナリ

議長(原) 他ニ御發言ナキ故第二讀會以下ヲ省
略シテ直ニ採決スベシ本案賛成ノ各位ノ起
立ヲ請フ

(全員起立)

議長(原) 全會一致可決セラレタリ

本日ハ之ニテ閉會ス

聖上入御

(午後五時三十五分閉會)

議長

書記官長 江本 雄

書記官

諸橋 襄

